
秋と冬

testrip

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋と冬

【Nコード】

N3077G

【作者名】

testrip

【あらすじ】

季節の変わり目に、二人の女の子が校庭で勝負という名のかけっこをします。同じだとか違うとか、それは曖昧な境界線。

秋の日差しが、私にとっては丁度良い具合だ。周りの子達は「春のぽかぽかした陽気が一番好きだ」と言うけれど、私にはどうも好きになれない。ぼんやりとされていて、頭がぼうつとするような陽気よりも、しんとした冬の前の静けさがある秋が一番好きだ。理解者はとても少数だけれど。

ゆつくりと伸びをすると、身体がソファアに少し沈んだ。寝るのはいいけど、お腹が空いたな。そう思い軽やかにキッチンへと向かった。日が当たっていた箇所のフローリングの床は、程良く暖かかった。

キッチンまで辿り着くと、ある事を思い出した。

今日はまだママもお姉ちゃんも帰って来てないんだった。

「あー」

私は、ご飯を自分では用意出来ないの、落胆の声を漏らすしかなかった。すると、更にお腹が空いた気がした。歩いてきた道程を戻る事ほど、憂鬱な事は無いと思う。静かな部屋に、耳を澄ませば聞こえる程度の足音だけが響いた。

ソファアに戻ると、先の自分の体温はすっかり消えてしまったらしく、やっぱり秋は嫌かもしれないなんて思ってしまった。

また暖め直しなあ。

渋々と身体を沈める。これを買ったときのママの嬉しそうな顔が、何故か浮かんだ。

「良いでしょ、これ。高かったのよー」そう言って、ママは嬉しそうに私の頭を撫でた。そんな嬉しそうな顔を見て、思わず釣られて笑ってしまった。

空腹と思い出に浸る中で、私は、庭にあるそれに目を奪われた。つらいつらりと揺れるそれは、薄だった。黄金色をしたそれは、妙に楽しそうに見えた。

そして、不意に心が落ち着いていくのが分かった。温かそうに秋の光を浴びて、薄が笑っている。もう何も言う事は無かった。大人しく寝ようと決心した。静かに目を閉じれば、逆に世界が広がった気がした。

*

人は人で、結局はみんな同じなんだ。そんな事を考えながら、随分と寒くなってきた街を歩いてきた。冷たい風が、制服の隙間から入り込んでくるのを尻目に、ブレザーのポケットに無愛想に手を入れた。左の方にだけ入れておいたカイロから、じんわりと温もりが伝わってきた。思わず頬が緩みそうになるのを堪えた。街中で一人笑う中学生だなんて、誰も見たくはないだろうから。

騒いでいる学生や、寒そうに腕を組むカップル、曇り一つ無いシヨウウィンドウ。全部が全部無機質に見えてきて、それらに興味すら湧かなかった。ただ一つ気になったのは、木に引つ掛かった風船だった。それも、空気の抜けたやつだ。風船は、あたし達にはんつと印象付けるような派手なシヨッキングピンクだった。誰が引つ掛けたのだろうか、誰が配っていたのだろうか。そんな思考がぐるぐると回った。皆目見当もつかないけれど、しばらくそれを眺める事にした。

もう日が暮れようとしていた。部活動をしていないあたしにしては、いつもより下校の時間が遅かった。その理由は、文化祭の用意という名の、青春を謳歌する行事をしていたからだ。たとえば、大層お母さんも喜ぶのだからうけれど、生憎違った。確かに周りは、謳歌してみたいだった。けどあたしは、図書室へと逃げてテスト勉強をしていた。自分の仕事は疾うの昔に終えていたので、誰もあたしを咎めようとはしなかった。下校が遅れたのは、こういう理由からだ。

風船は木の葉っぱに守られているおかげで、落ちる事無く、微動しているだけだった。そして眺め続けている内に、小さな衝動に駆られた。

取ろうかな。

それはほんの僅かな好奇心。しかし残念ながら、そんな思いはあ
たし自身によつて一瞬で砕け散った。どれだけ友達から浮世離れし
ていると言われても、あたしは歴とした人間で、もちろん心がある。
そうつまりは、羞恥心があるのだ。いくらスカートの下にスパッツ
を穿いていても、木に登る自信があつても、周りの目が気になる。

嗚呼、これじゃああたしも一緒だ。

ショッキングピンクがゆらりと揺れた。

どこかで、自分は違う思っていた事に対して嫌気がした。
帰ろう。

きつとお腹を空かせて待っているだろうから。と自分に言い訳を
して、ピンク色を視界から消した。二、三步を踏み出しても、まだ
頭の中にはちらちらとピンク色が踊っていた。それはもう、頗る楽
しそくに。

それからしばらくして、家まであと少し。という所で、携帯が震
えた。黙殺して家に帰る事も出来たけれど、しつこく震えるものだ
から、渋々通話ボタンを押した。

「もしもし」

「勝負よ！」

「は？」

「今すぐ校庭に來なさい！」

「ちよ、待っ」

ぶつりと無情にも通話は切れた。着信相手は隣のクラスの奴だっ
た。名前は何と言っただろうか。苗字は登録されているけれど、ど
うしてか下の名前が無かった。柊というその苗字が携帯に踊ったの
は、きつと久しぶりだ。

勝負。

その二文字があたしの好奇心をつんつんと突いていた。しかし、
興味が湧かなかった。如何せん二度目というのがいけなかった。

柊……さんは入学して間も無い頃に、今と同じ台詞をあたしに言

ったのだ。「勝負よ、河瀬さん！」と。一瞬、河瀬さんとは誰の事なのか、そしてこの子は頭がおかしいのかと真剣に悩んだのを覚えている。まあ結論から言うと、河瀬さんは、うちのクラスにはあたししかおらず、彼女は意外にも秀才だったというオチであった。

たまたま真面目に受けたスポーツテストと、たまたま出た良い結果。そして申し込まれた勝負。勝負内容は、五十メートル走と言うよりも、かけっこと言った方がしっくりくるようなものだった。それでもあの時の完勝は、なかなか良い思い出だ。

そして再び、少女達は駆け出す。つてか、あほらし。

そう心の中で失笑しつつも、無言で二、三回屈伸をした。今回もたまたまなのだ。たまたまそういう気分で、たまたまあほらしい事もやってみたくなった。それだけだ。

お母さんに、遅くなるという旨のメールを打ってしまえば、準備はもう万端だった。

駆け出したら、秋の空気が一瞬笑った気がした。さつき歩いて来た道程を戻るのは、酷く気の滅入る事だ。だから、それを振り払うかのように疾走した。学校にいる間だけ勉強するというスタンスが、意外なところで役立つ。空っぽの鞆は、走る事を邪魔しなかった。周りの目も気にせず、走った。こんな今なら、あの木にも登れるような気がした。

人間じゃ、なくなつた。

そう考えて嬉しくなつた。

学校に着いて、正門脇にある小さな扉を潜つた。校庭に入ると、朝礼台に腰掛ける彼女が目に入った。制服姿の彼女に、どうしてか違和感を感じた。

中学一年生以来、という言い方は正しくない。きつと中二の時も、中三の時も、彼女と擦れ違つたり、挨拶を交わしている筈なのだ。だけど、あたしにはそのくらい久しぶりな気がした。

柘さん。と呼びかけようとして止めた。どうも違う。他の呼び方をしていた筈だ。歯痒さから、結局小さく片手を挙げただけだった。

「久しぶりね」

先に声を発したのは柊さんだった。少し低くなった声からは、あの時の幼い姿が思い浮かばなかった。小さくて、機敏に動いていた彼女は、今では長身の立派な女性になっていた。あたしも背は高い方なのだけれど、彼女には恐らく負けているだろう。

返事をしようとしていると、彼女はぴよんと朝礼台から降りた。

そしてあたしは、完璧に返事をするタイミングを見失ってしまった。

「もう卒業ね」

「あー、うん」

卒業という単語は、あたしにとってとても大切なものだった。早く早くと急かす程に欲しいもので、それを手に入れてどうかではなかった。何かの柵をぶち抜いて、外へと飛び出す。そんな開放感溢れる存在だった。

彼女からその単語が出て来たのと同時に、段々と記憶が蘇ってくるのが分かった。勝負事以外の時の彼女は、至極普通の中学生なのだ。

そして、一步一步と近付いて来るその姿は、どんどんと形容がはつきりしていった。長めの髪が、秋の風に揺れていた。白い手や頬は雪みたいで、冬生まれの彼女にはぴったりだと思った。

嗚呼、そうだそうだ。

「深冬」
みふゆ

「何？ 急に」

「え、いやあ、その」

名前忘れててさ。とは口が裂けても言えないと思った。深冬というお気に入りの名前を忘れていた事に、内心苦笑するしか無かった。あたし達は、勝負があった日に初めて会話をした。そしてその際に、深冬という名前が気に入ってしまった。あたしは最初から彼女を呼び捨てで呼んでいたのだ。今思い返せば、何とも度胸のある娘である。

そうと分かれば、記憶は芋づる式にぼこぼこ出てきた。勝負の

後に交換した携帯アドレス、何故か意気投合して一緒にやったクラス委員。意外と仲良しだったのかもしれない。

てつきり続くのかと思つた卒業話は、妙にあっさりと終わってしまった。そして彼女不意に、彼女の口が開きかけて、閉じられた。もしかしたら、そのほんの小さな所作は、あの鮮明だった色よりも印象深かつたかもしれない。

「そんなことより」

ふつと彼女は、自分を正すようにして笑つてから、そう切り出した。次に続く言葉は安易に想像が出来た。あの時と一緒だ。

「勝負よ」

唯一違つのは、深冬の表情が僅かに寂しそうな事だけだった。

冬ではない、秋の夕日が、寄り道もせず西へと沈んでいた。散り散りになつた雲が、何かを嘆いているみたいだった。

知らぬ間に考え込んでいたあたしを尻目に、彼女はとつくに笑顔を取り戻していた。それを見ていると、何だか馬鹿らしくなつて、あたしも笑つた。あの時もあたしも、こうやって笑つていたのだらうか。馬鹿らしくなつて、考える事を止めて、新しい生活のもどかしさやらを、振り切ろうとして。

「で、また五十メートル走？」

「そうね。でも、測るのが面倒だから……適当にゴールを引いてきて」

そんな風に満面の笑みで言われてしまつたら「あたしかよ」と小さく反抗するくらいしか出来なかつた。

当ても無い適当という単語に釈然とせぬまま、小走りで校庭の反対側へと走つた。少しして、このくらいで良いだろう立ち止まつた。そんな適当な判断は「近い！」と彼女に一蹴された。その怒号に溜め息を一つ零して、先へと進んだ。

無意識のうちに手をポケットに入れていたらしく、左手が異常に熱い事に気付いた。汗ばむ程だったので、出して空気に晒した。徐々に夢から醒めるように、平温へと戻つていった。頭のどこかがび

りつと痛んで、少しだけ悲しくなったのは何故だろうか。

近いと言われた所から、結構の距離を離れた。すると、脇に小枝を見つけた。枯れてしまつて砂に塗れた、小さなそれだった。何かに促されるように、迷わずそこに線を引いた。文句を言われる前に駆け戻ると、案の定彼女は、不服そうに顔をしかめていた。

「まだ近くない？」

「そうかな」

まともに返事をする気の無いあたしは、その場で屈伸をした。ここまで全速力で来たせいか、足は悲鳴を上げていた。明日にはきつと、あたしが筋肉痛で、悲鳴を上げているのだろう。

「勝負に距離なんて関係無いよ」

自分でも、どうしてそう言ったのか、分からなかった。

「それでこそ千歳ちとせよ！」

「いやいや、どれでこそだよ。」

心の中ではそんな風に思いながらも、嬉しかった。あたし達の間で、昔と違う事はたくさんある。身長だとか、もちろん体重も、それに年齢、そして何よりも距離だった。

「千歳」と名前と呼ばれた事に、気恥ずかしさを覚えた。「そりやどーも」と苦し紛れに言った声は、自分でも分かるくらいに明るかった。

見た目は優等生なのに、体育会系な彼女が、おかしかった。

「じゃあ、始めましょう」

「え、あー」

「よーい」

「はやっ。待つ」「そういえば、あの時も勝手に、そして急に、深冬が合図を出したんだっけ。」

「どん！」

そしてまた、駆け出す合図をくれたのは、深冬だった。

クラウチングスタートなんて格好の良い真似は、あたし達には出

来なかった。だから、あの時と同じ格好で、二人ともスタートを切った。違うのは、あたしが出遅れなかった事。それと、疲れたせいなのか、二人の距離が開かない事だった。

走っている内に、足が重くなっていた。それでも走り続けようと頑張る自分が、何だかおかしかった。きつと、周りに人がいて、誰かがあほらしいと言ったとしても、あたしは走るんだろうなと思っただ。不格好でも、足がだるくても、笑われても。

また、人間じゃなくなった。

その言葉が自分を喜ばせた。世界とか日本とか、そんな事は何でもよくて、ただ人間っていう括りから脱出出来た事が、面白くて仕方が無かった。そのきっかけをくれたのが、何を隠そう隣にいる奴だと思つと、少し癪だったけれど。

あつという間にゴールが迫ってきた。なのに、あたし達はまったくスピードを緩めようとはしなかった。まるでそこにゴールなんて無いみたいに。

突き抜ける。

無我夢中という言葉は、こういう時に使うのだと思つた。小枝からは視線を上げて、真っ直ぐ前を見据えた。ゴールを突き抜けた瞬間に、それまでであった疾走感が消えた。地に足が付いていないような気がした。それは決して悪い意味ではなくて、どことなく世界とは逸脱したような感覚を覚えたのだった。

足が言う事を聞かなくなつて、スピードはどんどんと失速していった。それでも走つた。どこまでか、なんて分からなかった。そして気が付けば、視線の先に大木が見えてきた。このまま真っ直ぐいけば、

ぶつかる。

わくわくした。目の前に出て来た、まるで壁みたくのつぺりとしたそれにぶつかるのだ。そして、二人とも躊躇わずにそれにぶつかった。

どん、と鈍い音がして、あたし達は木の下にずるずると落ちた。

それはもう不恰好に、ぐしゃつと寝転んだ。肩で息をしているあたし達は、大層間拔けた。

「……っは。あー、無理か」

切れ切れの声でそう言った。隣の彼女は文字通りの乾いた声で「無理に決まってるじゃない」と笑った。擦れた声が、印象深かった。あの大きな木を、二人で突き抜けようとした事実には、笑うことしか出来なかった。これぞ馬鹿の、あほの極みだと感じた。そんな事を極めてどうするのと言われそうな気がした。

疲れて動く気がまったくしなかった。小さく動く度にかさかさという落ち葉が、何だか羨ましかった。

汗が風に冷まされて、妙に現実味を帯びていった。

「私ね」

いつもみたく大人びた声に戻った深冬が、そう切り出した。風が吹く度に、現実が返ってきた。どうしようもなく泣きなくなった。

途方に暮れた人間のように。

人間に、戻っちゃった。

「転校するの」

空を仰いでいたせいで、おかげで、深冬の顔は見えなかった。向こう側に置いてきた鞆の中に、マフラーがあつたなど、ぼんやり思い返した。

「そっか」

こつこつこのを、青天の霹靂と言うのだろうか。

返事は、寒さのせいで震えるような声になってしまった。冷たい現実が、向かって来たのだ。さっきまで立ち向かう事の出来たそれに、今はどう頑張っても勝てない気がした。

彼女は、うんと返事をしたのかもしれないし、ごめんねと謝ったのかもしれない。どちらにせよ、あたしには聞こえていなかった。

呆然と少しの間、時が流れていた。

理由なんて訊いても、きつと理解出来ない。どれだけ嘆いても、大好きな秋が過ぎていくように、仕様が無いのだ。だから、何も訊

かなかった。

「まだ冬でもないのに、あんたは行っちゃうわけだ」

口から不意に出たのは、そんな調子の言葉だった。呆気に取られていたのか、返事までは間があった。彼女だって、動揺しているのだろう。この状況にも、自分の転校にも。

「最近は何も冬みたいなものじゃない。だから丁度良い具合よ」

丁度良い具合と言った深冬は、自分にそう言い聞かすようだった。

「それは秋生まれのあたしへの宣戦布告ですか？」

「もう宣戦布告したわ」

「それもそうだ。勝負も終わったし」

笑って、笑って、現実を吹き飛ばすのではなくて、立ち向かった。静かに吹いた風が、心地良かった。二人ともが空を見上げていた。中途半端な暗さで、清々しさも何も無いのに、綺麗だった。一番大好きな秋だった。

「もうすぐ冬だよ」

「そうね」

いつてらっしゃいとか、頑張つて、なんて偉そうには言えなかった。もう誰かに「勝負よ！」なんて、意味不明な事を言われなくて済むのだ。そう思っても、実感は湧かなかった。薄れていた筈の思いが、今更に濃くなって、思い出された事が原因なのだと感じた。

「よーい」

またぶつかって、へたり込むかもしれないけれど。それでもまた笑ってぶつかる。あほらしい事でも、馬鹿みたいでも、やってみる。そんな事を教わったのだと、今更気付いた。

「どん」

強くも弱くもなく呟いたそれは、一気に静かな世界を駆け出した。

*

辺りも暗くなった頃に、あたし達は自然と解散した。去り際に深冬が言った「あ、私の勝ちだからね」という台詞は多分、一生あたしの心の中に残るのだろう。良い意味でも、悪い意味でも。……絶

対にあれば、あたしの勝ちだった筈だ。

がくがくになった足で、何とか家まで辿り着いた。ふと携帯を開けば、新着メール無し。意外とずばらなお母さんは、メールを見ていないらしかった。苦笑してから、門を潜った。小さな段差がこんなにも堪えるものなのかと、後悔した。

「ただい……びっくりしたあ」

扉を開けた瞬間に、飛び込んできたのは母の満面の笑みだった。とてつもなく不気味というか、悪寒がした。

「なに、どしたの」

冷静に靴を脱ぎながら、そう尋ねた。母は先ほどから「うふふ」ととっても気持ちの悪い笑い声を漏らしていた。正直言って、あまりどうしたのかとは訊きたくなかった。

「じゃーん。見て見て、可愛いでしょう」

ぐいっと、手に持ったそれをこちらへ突き出して、母は楽しそうだった。紛う事無きそれは、我が家のアイドルであるリンちゃんだった。よく見れば、首元に何かが窺えた。

手を差し出して、リンを受け取った。とても温かくて、思わず頬ずりをした。

「首輪、どこかで落として来たでしょう？ だから、新しいの買ったのよ」

「へー」

どれどれ、見ようではないか。

首元のふわふわな毛を退けた。すると、掻き分けた際に、鈴の音が聞こえてきた。音のする方を探って、固まってしまった。

ド派手なショッキングピンクの鈴が、リンの首元で誇らしげに鳴っていたのだ。

「これはないでしょ」

「えー、ありでしょ」

あたしの口調を真似るようにして、お母さんは自信満々にそう言った。普段から奇抜な事をする点では、親子そっくりだけれど、こ

ればつまりは子供のあたしでも驚いた。似合っているのならまだしも、残念ながら茶色のリンには似合っていないのだ。

あたしを支持するかのよう、リンがあたしに「にゃお」と鳴いてみせた。否、もしかしたらお母さんを弁護したのかもしれないけれど。

ピンクか。

思い出そうとせずとも、あの風船が頭を過ぎった。結局は手に入らなかったあれ。サイズは小さくなったけれど、これも同じような物だと自分に言い聞かせた。すると、似合っていないと思っていた首輪が、まるでリンの為に存在しているかのように思えた。

「ま、ありかもね」

でしょー！ と、母は言い残して、奥へと入って行った。玄関は寒くて、リンをより一層強く抱き締めた。「にゃ」と小さく零された鳴き声は、不満の声なのだろうか。分からないけれど、嫌がってはいない気がした。

「また、人間脱出だ」

一度はぶつかって諦めたそれが、今では手に入った。その事実が嬉しくて、頬が緩んだ。人間の違いは、脱出してから決まるのだからと感じた。

だからきつとまた、あたし達は駆け出すのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077g/>

秋と冬

2010年10月8日15時15分発行